

日本語学・日本語教育学部会

—概要—

加藤直子*

日本語学・日本語教育学部会は、12月18日午後1時15分から3時30分まで、文教育学部1号館会議室にて行われた。参加者も多く、盛況な部会となった。

本部会においては、大学院生3名と大学教員1名による以下の研究発表が行われた。

- ①「日本の大企業における女性管理職の言語使用と意識」パトリツィア・ディシィ・フジンスカ（お茶の水女子大学大学院研究生/アダム・ミツケウィッチ大学大学院生）
- ②「大学院生の実践からのことばの学び」佐野香織（お茶の水女子大学大学院生）
- ③「異文化間能力を育むための翻訳活用法—初級・中級の日本語クラスでの実践—」行木瑛子（ロンドン大学 SOAS 大学院生）
- ④「留学前後の日本語学習者の日本観・日本語観—複文化複言語使用者として—」岩崎典子（ロンドン大学 SOAS 教員）

パトリツィア・ディシィ・フジンスカさんの発表は、日本の大企業で管理職として働く女性の使用言語を分析した結果、女性の社会的役割と管理職の役割の衝突から生まれる言語的ジレンマを抱えているという報告であった。質疑応答では、この言語的ジレンマに関して、女性管理職にとってプラス（出世するための手段）でもあり、マイナス（もっとはっきり話したいが周囲の目を気にしてそれ

ができない）でもあることに関して活発な議論となった。

佐野香織さんの発表は、ヨーロッパの大学において大学院生に対して行った「ブログを作成し公開する」という実践事例から学習者が学んだこと（新たな知識を得る・支援役割を果たす等）を越境学習論や境界横断理論の視点から捉えるという新たな視点の報告であった。質疑応答では、ブログを作成するという実践が具体的にどのように行われたのかに関して活発な議論となった。

行木瑛子さんの発表は、翻訳活動を通してロンドン大学 SOAS の日本語学習者（初級・中級）がどのように異文化間能力を向上させることができたかに関する報告であった。翻訳活動は、日本の芸能人のブログ等を翻訳するという内容で、この活動を通して異文化間能力の向上につながった点や、中級の学生が十分に言語間・文化間の仲介者としての役割を果たしている点が明らかにされた。

岩崎典子先生の発表は、ロンドン大学 SOAS の日本語専攻の学生に対して行った半構造化インタビュー（日本留学前後）から明らかになった学習者の日本観・日本語観に関する報告であった。日本留学前後で、学習者は日本・日本語を肯定的に捉えており、日本留学中に感じた閉鎖性や外国人を特別視する傾向といった否定的な面も、集団としての日本・日本語を批判するのではなく、個人的なものとして受け止め、学習者が主体的に日本におけるストラテジーを構築していく様子が明らかにされた。

*お茶の水女子大学大学院院生

本部会では、今回の国際日本学コンソーシアムの全体テーマである「多文化共生社会に向けて」を踏まえ、様々な視点からの発表があり、活発な議論が行われた。

佐野香織さんと行木瑛子さんの発表は、実践を行うツールとしてブログが使用された点が特徴的であった。IT技術の発展やメディアの変容が、日本語教育の新たな実践を生み出し、新たな理論・視点から学習者を捉えなおすことにつながっていると感じた。

また、IT技術の発展とは反対に、人々の価値観が劇的に変化しないことも認識できた。依然として変わらない日本のジェンダー規範を指摘するパトリツィア・ディシィ・フジンスカさんの発表や日本に留学した学習者が閉鎖性を感じているという岩崎典子先生の発表は、日本がまだまだ固定的な枠の中にいることを鋭く指摘するものであった。

本部会に参加させていただいたことは、無意識のうちに自らが構築してきた様々なバイアスに気づく貴重な機会であり、これまで固定的に捉えていた「日本」「日本語」「男女のあり方」「学習者のあり方」というものから個人レベルで解放されていくことこそ「多文化共生」への第一歩なのだと痛感した。